

琵琶湖沿岸ヨシ帯 3 水域に放流したニゴロブナ稚魚の

沖曳網による再捕調査

杉江天音・根本守仁・片岡佳孝・寺井章人

1. 目的

琵琶湖沿岸ヨシ帯におけるニゴロブナの生育および動態研究の基礎資料とするため、ニゴロブナ稚魚の標識放流調査により、各放流地点における成長の特性を調査した。

2. 方法

2024 年 6～7 月に、琵琶湖沿岸 3 水域(長浜市延勝寺地先、近江八幡市牧地先、守山市赤野井地先)で標識種苗を放流した(表)。

これらには放流時の耳石径が分かり、かつ相互識別可能となる ALC 標識を施した。再捕調査は 2024 年 12 月 11 日～2025 年 2 月 25 日にかけて、琵琶湖北湖で沖曳網により採捕されたニゴロブナを対象に実施した。標本は冷凍保存とし、解凍後に体型を計測した。また、鱗の輪紋の乱れから 0 歳魚を選別し、ALC 標識の有無と種類を識別した。さらに、各個体の耳石の標識径を測定して放流時の体長を推定した。

また、別事業で推定された 2024 年 11 月時点の 0 歳魚資源尾数×採捕された標識魚の混入率から 11 月時点での標識魚の生残尾数を求め、放流尾数で割ることで放流からの生残率を求めた。

3. 結果

採捕された 0 歳魚 6,537 尾のうち、延勝寺地先、牧地先、赤野井地先の放流個体はそれぞれ 9 尾、12 尾、22 尾再捕された。

赤野井地先に放流した種苗は生残率が 12.9%と 3 種苗の中で有意に高く (χ^2 検定, $p < 0.05$) (図 1)、放流時の推定体長に対する再捕時の成長が他 2 地点より大きく、成長が

良好である傾向が見られた(図 2)。延勝寺地先および牧地先の標識放流個体については生残率および成長に顕著な差は認められないことから、この 2 地点における生育状況は類似していると考えられる。

今後は各水域のニゴロブナを取り巻く環境の特徴との相関について調査を続けていく。

表 各標識放流個体の放流日、尾数および平均体長

放流地点	放流日	放流尾数	平均体長 (mm)
赤野井地先	6/24, 6/30	219,700	25.40
牧地先	7/2	201,300	28.60
延勝寺地先	7/5	212,100	23.87

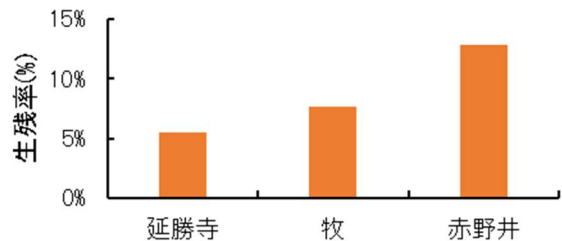


図 1 各標識放流個体の放流から 11 月までの生残率

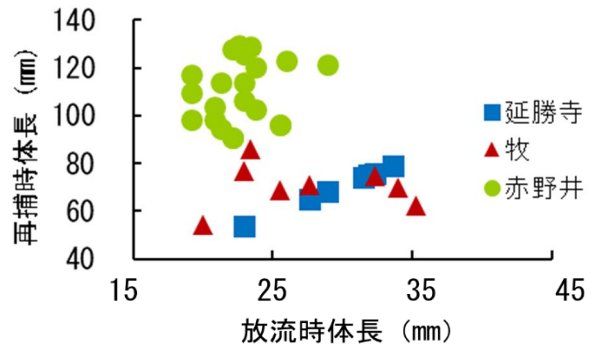


図 2 標識放流個体の放流時および再捕時の体長の関係